震災・原発事故──その衝撃と日本のこれから

竹　内　敬　二
朝日新聞編集委員

きょうは、1周年にほぼ近づいておりまして、早いものだなと思うと同時に、現地を見ると何も変わっていない。原発から逃げた人は帰っていないし、そして津波に洗われた土地には今何も建っていないという状況です。

しかし、大きく変わっていることがありまして、原子力発電所は日本に54あるんですが、52とまっているんですよね。じゃ、日本のエネルギーを支えてきたと言われていた原子力発電所が52とまっていて、じゃ、そんなに必要だったのかという話にもなっております。

きょうは、原発事故から1年がたって、主に原発事故の話をしますが、日本にとってこれは何だったのかということをお話ししたいと思います。あの原発事故の前と後では、日本の社会はもう別の社会になって、質的に別の社会になってしまっているんだということです。

福島はどうなっているか、福島の事故があぶり出した日本の社会のこと、それから原子力とは何か、それからチェルノブイリ、そして、この震災は、震災、原子力事故は、日本の第3の敗戦と言っているような人もいます、そういう話、それから原子力はこれからどうしたらいいかのような話をしていきたいと思います。

これは震災直後の仙台市荒浜地区というところの絵です。写真で、私が撮りましたが、この荒浜小学校というのがここにありまして、3階まで水が来たそうです。ここに写っているのは全部住宅地ですね。住宅地なんです。きれいな住宅地で、防風林ですね、防災林、下のほうはもう少し枝があったんですが、津波で刈り取られているみたいになっております。私は、これは1週間後ぐらいですかね、10日後ぐらいに行って、もう全然無人の地に、延々としたこういう状況が続くわけです。

それで、高速道路に全部打ち寄せられて、高速道路の土手の後ろと前では全然違う風景があるという、そういう状況でしたね。高速道路がちょっと高くなっていたりして、こういうのが至るところ、だれも片づけない、また片づけられないですよね。人だけがいないということで。

これを見ていただきたいんですが、家はこういうふうに壊れるんですよね。今から建てるんじゃないかと思うような感じになっています。ふっと上に浮いて、ちょっと浮き上がりますから、ふっと横に押されて、どこまでいっているかはわからない、その隣にある家は恐らくこの家じゃないですね。ぷかぷか浮いて、気が向いたところにおりるというような感じになっている。です

から、きれいに削られるというか、今から家を建てかえするんではないかなというような感じになっています。

これは、どこから来たかわからないお寺ですね。運ばれてきて、あっちに行ったりこっちに行ったりして、ある川の中に落ちついている状況という、こういうのはもうどこでも見られました。

これは、仙台市の近くの野蒜小学校というところで、これ、なぜ、こんな資料を出したかというと、これ、1階まで来ているんですね。ちょうどここまで来ていまして、これ、1階の天井まで来ているんですね。それで、ここの窓ガラスを見ていただければわかるんですが、外側から中側にバシャーンと来て、その名残がまだあって、物すごい勢いで来た、水が、津波が来たというのがわかります。

ここは、私、行ったときには知らなかったんですが、後から聞くと、野蒜って蒜という変な字、蒜山の蒜という、野原の「野」に蒜山の「蒜」、小学校ですが、みんなここに避難してきていて、水が来たから体育館に逃げた、体育館に水が入ってきて、体育館の観覧席こにみんな逃げて、そうするとばーっと勢いよく黒い水が入ってきて、その校舎の中を渦を巻いたらしいですね、その津波が。ぐるぐる回って、入ったり出たりしますから、ぐるぐる回って、その中を人が何人もぐるぐる回ったらしい。この小学校で十数人が亡くなっていますが、そのうち9人は体育館の人たちに助けられて、体育館でぐるぐる回っているのを何とか助けてあげた。けれども、だれも助けに来ないから（もう地域が壊滅していますから）3月ですから、濡れたまま夜を過ごしていて低体温症で凍死です。ですから、水におぼれたんじゃなくて、助かったのに助からなかった。だれも助けに来ませんから、もう。そういう小学校であるというのを私も後で知りました。

それから、これは余り知られていないことですが、これ、朝日新聞が、朝日新聞も新聞を出すだけじゃなくて号外というのを新聞社の近くにばっばっとまくんですが、第1号の号外です。第1号の号外、これは何分ですかね、写真が3時9分ですね。これは東京の写真です。東京の朝日新聞の建物から外を見た写真なんですが、まだ現地とは通信が途絶していて、そんな状況の中で、これは3時9分ということは2時46分に起きましたから、30分後ぐらいですか。30分弱、20何分後ですね。

ですから、東京でも火事が起きていまして、それを写真に撮って記事を書いて、第1号の号外、出したんですが、実は問題はこのマグニチュード7.9、今回の地震は9なんです。M9、マグニチュード9なんです。9と8ではエネルギーは30倍違うんです。マグニチュードが1違えば大まかに30倍違うと。規模とかエネルギー、地震の大きさがですね。つまり、最初、気象庁は7.9と発表したんです。津波は3メートル、大きいところでも6メートルと発表しました。

何が起きたかというと、それをテレビで見て、私もそうですが、何だ、そのぐらいかと。東京ですごく揺れたけど、そのぐらいかと。マグニチュード7台というのはよくあります。関西の大震災は7.4、震源が浅いほうでしたから大きな被害になりましたけれども、海の中で起きるのは7はしょっちゅうあります、9というのは見たことがないです。スマトラ地震が9とか8.9ですか

ら、日本では起きたことがないので、7.9と言われたときに、ああそうかと、その程度かと、結構大きいと思ったけどなと、私も思いました。

そして、現地の人、テレビつけます、津波にご注意ください、3メートルです、一番高いところが6メートルですと。実はこれは大うそなんです。それは45分後ぐらいに、訂正、だんだん訂正されるんですが、そのときには、テレビを見てもう外に出た人、訂正されたころには停電になっているんです、現地は全部。だからテレビもないわけです。

それで、消防のサイレンとともに、津波は高く、10メートル以上という津波高さに1時間ぐらいで訂正していくんですが、もうそのころはみんな海に行ったり、それから、まあいいやと、まあ2階にいようかなと、3メートルだと2階で十分です、そういうことで物すごく被害が大きくなったと。

これは、なぜこうなるかというと、日本の場合は地震が来たら3分で予報を出せと言われていたんです。地震が起きて3分。3分で津波の予報も出せと、気象庁は言われていました。だから出したんです。それが津波高さ3メートルでマグニチュード7.9。なぜ3分かというと、昔、奥尻地震というのがありまして、奥尻島が津波でやられました。あれ、奥尻島のすぐ横で地震が起きたので、5分で津波が来たんですよ。5分ぐらいで。それで、早く出さないと役に立たないということになりまして、とにかく最初のちょっとした揺れで、もう計算して出すことになっていたんです。その出し方は、やると、マグニチュード8以上は物すごい過小評価をする式だったんですよね。でも、8はまあ余り起こらないよということで、まあいいかと思っていたものが、9が来てしまった。その何百年に1度のときに、その式の大間違いが物すごく大きなものになって、被害を大きくした。

これは、よく原子力発電所の問題で想定外と言いますが、気象庁の物すごく大きな想定外、想定外で、今は、気象庁は、次はちゃんとやるからと式を直しました。もうちょっとゆっくりしてでもいい値を出せというふうに直しました。だけど、恐らく役に立つのは何百年か後ですよね。つまり、今回のあの取り返しのつかないことは取り返しがつかない。

このときに私は、日本が7.9といったときに、私の同僚はパソコンを開いて、アメリカの地質調査所、日本でいえば気象庁みたいなところがあるんですが、そこが日本の地震、マグニチュード8.9と書いていたんですよ。彼らは、後から調べると、30分ぐらいかかって8.9を出していました。二十何分という。私の同僚が、竹内さん、アメリカは――USGSといいますが――USGSは8.9って言ってるよと言う。8.9なんて僕らは聞いたことないですから、それは間違いだよ、アメリカ間違ってるよと言っていたんですよ。でもあっていたんですね。そういう数字が最初から出れば、もっとあれは防げたという、隠れた大きな問題がありました。

これは、原子力発電所が爆発した映像です。これは13日の新聞ですが、この映像で私はもう世界の原子力はだめになるなと、こんな絶対に事故を起こしてはならないと言っていた原子力発電所で爆発事故まで起こしたらだめになる、もうだめだなと思いましたが、世界の原子力発電所は

なかなかだめになっておりません。

ここに、最悪の事態回避へ懸命という記事を書いています。これも私の記事ですが、そして、それを上から見るとこういう状況になっていると。これは直後の写真ですから、1号炉、2号炉、3号炉、もう爆撃を受けたようになっている。1号炉、3号炉は水素爆発。これは今、1週間ほど前に出ました民間の事故調査委員会の報告書です。これが今、話題になっていまして、菅さんがやり過ぎだとか、東京電力が逃げるとかという話がたくさんあります。

実は、地震直後、私どもも取材にいろいろ苦労しまして、実は、当局の発表というのが過小評価、メルトダウン、メルトダウンというのは燃料がどろどろに溶けて底にたまるというのをメルトダウンといいますが、メルトダウンしているのかしていないのかはっきりわからない、しているであろうと発表した広報官が更迭されたり、それから外の学者なんかもしていると、水がなくなったら必ずするものだからしていると言うんだけれども、当局は東京電力とか保安院とかいうのはわからない、わからないのはわからないんだけれども、わからないから、メルトダウンではなくて燃料が損傷、メルトダウンというのは恐ろしい、溶け落ちるというイメージがありますが、燃料が損傷という単語にすると怖くないので、その言葉を使っていました。

私たちは新聞で、当局はメルトダウンと言ってないけれども、多くの人はメルトダウンと言っていると、2つ並列で報道する日が続きまして、そして、後で考えてみると、1号機は3月11日、もうその日ですね、午後8時ということは地震が起きて5時間目にはもうメルトダウンしていた。2号機は14日にしていた。3号機は13日にしていた。丸括弧というのは、これは東京電力が、この時間にしていただろうと発表した日なんです。こんなのんきな、もう2カ月もたって、実はしていましたと、本当にもっとどんどん進んでいたら、もうむちゃくちゃになっていますよね。だから、こういうわからないときに過小発表するというのが今回の特徴です。

それで、最も怖かったのは、3月15日です。3月15日というのはどういう日、これは覚えておいていただきたいと思います。4日目ですね。3日半ぐらいたっていますが、3月15日は、まず、それまでに1号機、3号機が水素爆発していまして、それからその15日の夜中、零時、1時、2時のころに2号炉の格納容器というものの圧力がどんどん上がっていったんですよ。2号機の格納容器というのは圧力容器の外側にあるもので、それが壊れるとむちゃくちゃ濃いやつが出るわけですが、それは通常は1気圧です。そして、これ以上だったら破裂しちゃうぞという強度が4気圧です。4気圧まで耐えられるようになっています。そのとき、未明には8気圧になっているんです。もうぱんぱんですね。皆さん、車のタイヤは2気圧弱ですよね。あれでも相当圧をかけているのに2気圧弱。

8気圧になっていますから、もう壊れる、壊れる、どうしようといって、ベントというガス抜きをやろうとしてうまくいかなかったりしているときに、東京電力が撤退すると言い始めたんです。撤退する。これは今、やぶの中になっていまして、「全員撤退するとは言っていない、我々」と言うんですが、東京電力の清水社長が午前1時から2時にかけて、菅さん、それから枝野さん、

それから海江田さん、海江田さんは当時経済産業大臣、枝野さんは官房長官ですが、なんかに何度も何度も電話をかけて、撤退させていただきたいと、もうもたないと。現場はもう怖くてしようがないですよね。放射能はどんどん上がっているし、爆発しそうだしということで、もし撤退したらどうなるかと、いろいろ皆さん相談しました。

そうすると、人が残らないわけですから、水ももう入れることはできません。そしたら原子力発電所は3つ、順番に爆発していって、それで今の状況より何倍も何倍も壊れて、東京まであれがいくだろうというふうになって、これは撤退はならんぞと、だけど、ここは難しいんですけれども、残れと言うとその人たちは死ぬかもわからないんです。要するに、原子力発電所ってそういうものなんですよ。枝野さんなんかも、これはもう首相の問題だということで、午前3時20分、菅総理は寝ていたんですね、仮眠中で。ちょっと揺り起こして、もう、ちょっと、菅さん、あなたじゃないと判断できないと。菅さんはもう聞いて激怒しまして、イラカンと言われて、激怒すると本当怖いらしいですが、「おまえら」と言ったらしい。私も、菅さんが首相をやめた後、インタビューしましたが、その話になると、かーっとなって、ここはインタビュー中ですから、まあそんなに、というほどかーっとなりますが、どうなるのかわかっているのか、1号炉、2号炉、3号炉が順番に爆発して東京だって住めなくなるだろうと言って、そこにいる東京電力の社長を呼んでいますからね。呼んで、その社長とか、それから細野さんとか、細野さんも怖かったと言ってました。すごいどなったらしいんです。わかってるかと、もう福島だけじゃないぞと、東京の吉祥寺だって人が住めないんだぞといって、吉祥寺って何ですかといったら、私の自宅があるんだと、そこまで心配していたという。

清水社長を呼び出して、絶対やめろと、撤退はだめだと、撤退なんかしたら東電つぶれるぞという、この言葉は残っていますが、東電つぶれるどころじゃなくて、日本がつぶれるんですよ。東京がつぶれますから。残れと言って結果的に残ったわけです。結果的にはもう少し壊れましたら物すごいぼかーんという大爆発が起きるのに、結果的には2号炉の格納器は爆発ではなくてひびが入ったとかと言っています。8気圧が1気圧になりました、ぷしゅーと大きな音とともに。何だ、何だとなった、その途端に物すごい放射能が出ましたから、恐らくひびがいっていたと。まだわかりませんよ、いまだに見ること、近づくことができません。

東電の社長を呼び出して、撤退は絶対にならんといったら、はい、わかりましたということで、その撤退はなくて今の日本があるんですが、今、東京電力は、我々は全面撤退と言った覚えはないというふうに説明していますが、東京電力社長の電話を受けて話を聞いた菅さん、それから枝野さん、細野さん、それから保安院の人、全員が全面撤退と聞いて、そのつもりで相談して、困った困ったと言っていたところを見ると、やはり全面撤退を言っていたと。でも、ちょっと信じられないことですね。でも、東京電力からしたら、何百人もまだ残っていた、原発にもいたわけですから、その人たちの命を守る、そういうぎりぎりのものだったわけではあります。だけど、今は、東京電力は言った覚えがないと。だけど、枝野さんとか細野さんも言っていますが、部分

撤退なら何人残してどうしてというような計画もあるはずだと。紙一枚そんなものはないし、そんなことは一言も言っていないということで、そして午前1時から2時にかけて何度も何度も電話をかけてきたというのは、全員が逃げるつもりだったんでしょうということになっています。でも、今はやぶの中になっています。

こういう報告書にも東電は全面撤退をしていたはずだ、に違いないというふうに書かれています。東京電力はインタビューは拒否しております。そういうことがありまして、最も怖かったのは3月15日だというのを覚えておいてください。

そして、今どうなっているかというのはこういう状況ですね。浪江町。今、広い範囲で人が基本的に逃げています。原爆だって10万人ぐらい逃げていますので、物すごく広い範囲が無人になっています。そして、そこは大変悲惨なことになっています。おびただしい家畜が餓死していると。それから豚、牛、餓死です。それからペットを置き去りです。ペットはまだ生きているんですよね。犬なんか、家に行くと家にいるというんですよね。だから、皆さんも犬を飼っていらっしゃる人は多いけれども、残してくるというのはちょっと考えただけでかわいそうですよね。

牛は、生き残った牛は繁殖しています。こんなふうに、これ、闘牛の牛みたいでしょう。こういう、普通の肉牛ですよ、太らされて肉になるのが、森から森へ、これ、人間を見て校庭にたむろしていたのが、ばーっと山に逃げるところらしいんですが、うちのカメラマンが言っていましたが、こういう状況なんです。そして、牛は寒さに結構強いので少し適応すれば、特に肉牛はふえているんです、今。

今、その無人地帯は、猿がふえ、シカがふえる、牛がふえ、野良犬がふえ、大変な状況になっています。我々もなかなか入れないんですよ。そこに入るときには自治体の人と一緒に行くとかいろいろあるので、入れないのですが、時々行くと、もう動物天国になりつつある。だから、道なんかは猿とかがやっぱり歩いているんですね。シカはいっぱいいる、イノシシ。そもそも山が多いところですから。

そして、これ、ダチョウ園ですよ。ダチョウがいるんですね。ダチョウは日本にいたっけと思うんですが、いるんですよ。実は、大熊町という原発がある町、富岡町の本岡本町というところに原発があるんですが、ダチョウ園というのがあったんですよね。なぜか、ダチョウの食肉でちょっと繁殖させていたダチョウ園というのがありまして、そこから逃げているものです。実は、事故を起こした福島第一原子力発電所にもダチョウがいたんです。飼っていたんです。なぜかというと、子供たちが来て、ダチョウを見て楽しむということもあるし、それからちょっと汚い話ですが、ダチョウは自分のふんを食べるんですね。ふんを食べる動物は結構いるんですよ。それはなぜかというと、一遍こなれているし、栄養素もいっぱいあるし、結構いい栄養素なんですよ、汚いと思わなければ。だから食べる動物と食べない動物がありまして、人間とか犬とかは基本的に食べない動物なんですが、食べるんですよね。それで、廃棄物を食べてまた元気になるというのは、原子力発電所の使用済み燃料という廃棄物を、プルトニウムを使ってやる核燃サイクルに

ふさわしいということで飼ったそうです。

それで、もう三、四年前に大熊町のダチョウ園に返していて、そのダチョウ園から逃げて何羽かが広がっている。これもう11月9日ですから、半年ですよね。何を食べているのかなと。原発にいたダチョウは名前がついていて、1匹はシュトラウス君といってヨハン・シュトラウスのシュトラウス、何とロマンチックな名前をつけて、これがシュトラウス君かどうかはちょっとわからないんですが、呼んでみなきゃわからないんですが、これ、バスの中から撮った写真ですが、人間になれているのでちょっとよけなかった。犬もみんな近づいてきます。人間になれているから。このダチョウ君、シュトラウス君もじっとして立っていますね。このシュトラウスというのはドイツ語でダチョウという意味らしいですね。覚えておいてください。ヨハン・シュトラウスのシュトラウスはダチョウという、余りいい意味ではありませんですね。

これは、よく問題になるスピーディーというもので、今、どっちへ汚れがいっていると、これはある時期ですけれども、今問題なのはこの辺が汚れているんですよね。この辺が、左上、だから原発から西、北ですね。北西方向への帯のように汚れていると。その汚れはほとんど3月15日に出た放射能です。こっちが汚れているぞというのはスピーディーというもので大体わかったんですが、それが発表されたのが23日なんです。ここもいいかげんな、また役人が、後から、いや、それに入れるデータが足りなかったからと言っているんですよね。

だけど、今回の地震で明らかになったのは、責任者の無責任さというのがあって、その保安院の人間は原子力発電所がちゃんと運転できているかどうかを管理するために、常に、ここだったら8人ぐらい、6人から8人、ここに住み込んでいるわけです。その人たちは、事故が起きた後、ずっと何をしているかを見て、東京に連絡してこなきゃならないんだけれども、オフサイトセンターという本当はいろんなところのセンターにあるのは隣にあったんですが、ここにいって、オフサイトセンターといってもだれもなかなか来られなくて、8人、国の検査官、保安検査官というんですが、8人、彼らだけでいて、怖くなって逃げ帰っているんです。今、問題になっています。根性ないんですよ。根性ないけれどもやっぱり放射能がどんどん上がっていますから、怖かったのも事実です。だから、そういうものだと思っていないんですね。どうせ大丈夫だというのが日本の原子力発電の特徴ですから。どうせ大丈夫だと思っているうちに、みんな本当に思っちゃうんですよ。大丈夫だというのは、原子力発電所をつくる側が現地に行って地元の人に絶対大丈夫ですからつくらせてくださいという方便ですよ。方便だったんですが、方便を20年も30年も繰り返していたら、自分自身にそれが頭の中に入っちゃって、安全審査、安全規制の中にも入って、日本では起こらないと入っちゃって、方便が方便じゃなくて催眠術みたいになっているのが日本の問題ですね。

これは、ちょっと今ないと思いますが、1994年の記事です、2月2日、これも私が書いた記事です。偶然ですが、これは何かというと、炉心溶融を含めて対策をしますと、電力業界が転換、原発直しますと。今回、ベント、ベントといってガス抜き穴を使いました。それでプシューと出

して、それで物すごく土地は汚れたんですが、爆発を防いだことが多々あります、何回か。その穴というのは、この 94 年につくると決まったんです。その記事なんです。実際つくられたのは 95 年から 2000 年ぐらい。穴が格納容器にいざというときあけることのできる穴があいているのは BWR という沸騰水型、東京電力なんかそうですが、関西電力のはまだまだ穴があいていません。関西電力の TWR、加圧水型炉というのはこれからつけるといいますが、まだできていない。

こうやって、穴をこれからあけますよというようなことを決めたのは 94 年です。なぜこうなったかというと、1979 年にスリーマイル島事故、スリーマイルアイランド事故というのがアメリカでありまして、そこで水素爆発があったんです、格納容器の中で。で、危ないということで、格納容器、いざとなったらガス抜きができる穴をあけようということになって、米国のものはもう全部ついた。

日本は、ずっと言われていたことは、大事故は日本の炉では起きない、日本の炉に限って起きない、これはうちの子に限ってという症候群と言われていますが、うちの炉は大丈夫とずっと言ってきたんです。嫌々つけることを決めたのが、94 年です。実際、工事は 2000 年までと書かれました。だから、嫌々ながらでもやってもらっていて、まあよかったという。

そして、日本では事故が起きると、起きないと思っているものだから、もう大変あたふたあたふたとしちゃう。だから、大事故が本当に起きたらあたふたというのが日本の今回の事故の特徴です。見出しをつけるのだったら、いざ起きるとあたふた、責任者無責任、逃げ帰る、こういうふうに思っていただければいいと思います。

そして、普通は菅さんの周りにチームができて、例えば原子力安全委員の斑目さんという人がいますが、菅さんが斑目さんに、今、原子炉はどうなっているんだと、10 時間後はどうなるんだと、ちゃんと報告しろと、こういうふうに言いますよね。そうすると、斑目さんはどうすべきかというと、原子力研究所みたいなところに電話して、コンピュータでちょっとやってくれと、今、炉が壊れていてシナリオ 1 だったらこうなりそうだと、何時間後に水素爆発が起きそうだと、こうなるからこうなりそうだと、やっぱり大型コンピュータで計算しないとわからないんですよ、あのプラントというものはパイプのおばけですから。パイプのおばけのどこかが壊れどこが壊れていないと、いろんなシチュエーションでやってみるということをしなきゃならない。

しかし、実際はどんなことが起きたかというと、菅さんが斑目さんに、「どうだ、水素爆発が起きると言っている人がいるがどう思っている」と、斑目さんは、起きないわけではないと答える。もう、国語の問題なんです。起きないわけではない。で、バーンと 6 時間後に起きたんです。そしたら斑目さんは、ああと頭を抱えてへたりこんだと、この報告書に書かれていますが、こういうときに、起きないわけではないと、国語の解釈じゃないんですよ、部分否定だの全否定だのやっている場合じゃなくて、起きる蓋然性、可能性は高いか低いかを計算して言わなきゃならないのに、そういう計算をしなかった、させなかった。

斑目さんは、朝日新聞の記事に対して、「そのとき私は図面を思い出して、原子力発電所のあの

部屋があって、この部屋があって、右に行ったらこの部屋があってと、図面を一生懸命思い出していた」と、そういうことを答えて記事になっていますが、私ははっきり言ってうそだと思います。そんな簡単な、右に行ってトイレがあって、左に行ったらリビングがあって、マンションですよ、それは。何かマンション見に行って、モデルルーム見に行って、どうだったと言われて、奥さんに、いや、右がトイレで左がだったかなと、その程度の話では全然わからないわけですから。そういうことを言うというのは、本当に何もわからなかったんですね。それで、感覚的に国語的に、水素爆発はないわけではないと言って、後で爆発が起きましたから、国会で問題になって、あなたは間違っていたじゃないかと。そしたら、私は全否定したわけではない、ないわけではないと申し上げたとか、そういうことを言っているのが日本の安全のオーソリティーのレベルなんですよね。

それから、役に立たなかったオフサイトセンターといいますが、オフサイトセンターというのは原発からすぐ近くに1つ建物があって、日ごろは何も使わないんです。事故が起きたら、そこにみんな関係者が集まって、メディアも集まって、そこで指示をしてということになっているんですが、今回、近過ぎて放射能が高過ぎてだれも行かない。行ったのが先ほど申し上げた保安検査官という保安院の人で、行って、だれも来ないなと、怖いなと、もう逃げようといって、逃げるにしても東京に連絡しないと怒られるなといって電話しても電話が通じないからもう勝手に逃げちゃったという、そういう逃げ帰った保安院職員というので有名になったオフサイトセンターで、もうオフサイトセンターは役に立たないということで、一度も使われず、各日本の各サイトにあるんですよ。原発のあるところに必ずオフサイトセンターがあって、それで電話が何十台も生きていて、がらんどうなんですよ。それで、いざというときのためにつくったんですよ、2000年ぐらいに。私は何度か取材に行って、こんな役に立たない、こんなところに責任者が来ますかと、みんな、首相だったら首相官邸にいるし、役人だったら役所にいるし、我々だったらいちいちそんなところに行かなくて役所に行ったり、朝日新聞だったら朝日新聞で記事を書いたりします。それだって、わざわざ、日ごろ何も使っていないところに行きますかといったら、法律で決まったからといいますが、これは何かつぶすそうです、もう。日本の歴史で一番役に立たなかったセンターがオフサイトセンターで、各原子力発電所の場所に1個ずつあります。また、皆さん、敦賀とか行かれたらオフサイトセンター見学されたらいいと思います。つぶされる前に。

すべては、日本では大事故が起きないからという、最初は方便、それが自分自身への自己催眠みたいになっていたわけです。

チェルノブイリでは半径30キロぐらいの広い土地がまず無人にさせられまして、逃げろということで、強制疎開です。そのときに、それ、1986年ですよ、1987年に日本の原子力発電所の近くで、伊方とか、9月1日防災の日というのがありまして、訓練するわけですね、火事だとか洪水だとか地震だとか。原子力発電所の事故だというのもあって、じゃ、原子力発電所から人が逃げるやつも入れようと、防災訓練です。という話も始まったんですが、物すごく反対とか問題が出

てきまして、日本では起きない、放射能が外に出ることないのに何で逃げるんだという、大変根本的な課題にぶつかりまして、それは難しいな、起きないけど訓練しようとか何か言われまして、でもここで逃げる訓練なんかしたら多くの人が不安がるということになりまして、実際、伊方だったか九州の玄界だかどこだったか忘れたんですが、実際、住民の人たちがなくて、役所の職員が名札かけて模擬住民 ── 模擬住民というのは私見たことないんですが、今まで ── 模擬住民にして一緒に逃げると。そういうことをして、最初、住民避難訓練も形だけしたと。模擬住民をやっているときに、担架で運ばれている人がいたんですよ。何で担架で模擬住民が運ばれると、いや、放射能に当たってというから、そこがまた問題になって、放射能は出ないんでしょう、なるほど出ない、そうすると、じゃ、放射能で、担架で運ばれるのおかしいでしょうと、そうですねと、じゃ、その人は捻挫となったんです。模擬住民が捻挫で。こんな遊びをやっていたんですよ。こんな遊びをやっているから、いざとなると何もできない。

日本の場合、重点区域というのは 8 キロから 10 キロ、8 キロから 10 キロってあいまいですね。8 キロと言えばいいし、10 キロと言えばいい。8 キロから 10 キロでは重点的な防災計画立てましょうとなっていたわけです、今までですよ。今は 30 キロになっちゃったんですが、この今回の事故の後。8 キロから 10 キロ、8 から 10 の意味はと、これ、おもしろいんですが、人口が大きな都市を入れたくないんです、面倒くさいから。その人たちがどう逃げるとか、もう考えただけでも面倒くさいから。それで、10 キロというのが世界的によく使われていたり、切りはいいと。だけど、10 キロにすると、島田原発で松江市がちょっと入っちゃうんですね。島根だけは 8 にしたいと。もう、すごく政治的というか遊びなんですよ

今回は、何十キロも逃げていますよね。ということで、何の計画もない。福島原発でまず 20 キロとか 10 キロで線を引いているから、半径 20 キロでコンパスで線を引いて、これが重点避難勧告区域となったときに福島県の役人に記者が「10 キロのコンパスで何人いるんですか、そこには」、「わからない」と言うんですよね、そんなこと考えたこともないから。市長村をまたぎますからね。大体でもわからない。「20 キロで何人ですか」、「わからない」。つまり、何の用意もしていないんですよ、何の用意も。起きないから。日本で起きないから。起きたらあかんと。なぜ起きないかというと、日本では停電が起きないから。停電が起きてもすぐ直る。停電というのはまあ落雷だと、それで 1 分とかでもとに戻る。まあ、確かに長い停電はなかなか起こらないんですが、雪なんかでは結構起きているんですけどね、半日とか。でも原子力発電所はちゃんとやっているから絶対起きないと。

でも、アメリカとかフランスでも同じような安全対策をとっていますが、停電は起きると言っている。つまり、テロが、だれかがミサイルをぶち込むとか送電線を切るとか、そういう破壊活動があれば起きるわけですから、起きた後のことも計画にあるんですが、日本は起きないと決めたら、男らしいですね、もうないんです、計画に。なぜ起きないか、日本は長い停電が。社会が安定しているから。そういう人たち、悪い人がいないから。まあ、楽な国ですね、こういう面で

は。だから、こんな状況になるんです。

それから、ちょっと原子力発電所というもののお話をしておきたいと思います。原子力発電所というのは大変難しそうですが、原理は非常に簡単で、火力発電所と一緒です。やかんでお湯を沸かすとシュッと蒸気が出ます。物すごくがんがん沸かすとシューッと出ますよね。その蒸気を使うのは火力発電所、石炭を燃やしてお湯をつくる、蒸気をつくる、それからガスを燃やしてお湯をつくる、全部一緒です。原子力発電所はウランという核燃料を核分裂させて熱くしてシューッと出す、そのシューッと出すので羽のところに当てて、くるくる風車みたいなのを回して、その先っちょに発電機がついていて、発電機は磁石ですから、磁石を、コイルの中を磁石を回せば電気が起きる。だから、つよい蒸気をつくるというのは火力発電所と一緒なんですよ。

だけど、原子力発電所はちょっとのウランで、石油もうドラム缶何本分とかという物すごい強い力を持って、大量に安くできるというのが売りなんですよね。原理は火力発電所と一緒です。しかし、大事なのは、これだけの熱をこれだけの電気にかえる熱交換率、発電効率というんですが、それは原子力発電所は物すごく低いんです。熱を 100 としますと電気にかわるのは 30 から 33 しかないんですね。30％です。今、大阪ガスの堺なんかにある新鋭の LNG 発電所なんかだったら 50 とか 60 とかですね。発電効率が高いんですね。

今、最近、コンバインドサイクルという名前がありますが、コンバインドサイクルは、コンバインドだから結合されたサイクルですね。2 つのサイクルのことをコンバインドサイクルといいますが、2 回発電するんですよ。物すごく強い蒸気をシューッとやって 1 回蒸気というかガスを出して、発電機回して、その余りでもう一回回すぐらい、それは最初、高温高圧ができるからです。原子力発電所は火力発電所に比べて低温低圧です。最初のおかまの中の圧力がそもそも低いんです。物すごく高圧と思いがちですが、火力発電所のほうが圧倒的に高いんです。例えば、原子力発電所は東電の原発で一番最初の圧力が 70 気圧、関西電力なんかは 150 気圧、これは加圧水型という別のタイプですからね。でも、一般のその辺の火力発電所は 300 気圧とかですね、物すごく高いんですよ。だから効率がいいんです。原子力発電所はオールドテクノロジーと言われていて、これ以上発展しない。

何で最初から原子力発電所を高くしてやればいいと思う、みんな思うんですが、なぜしないか、やっぱり怖いからです。いざとなったときに大爆発が起きる。いざ、やっぱりいざとなったときにどうできるか、火力発電所も大爆発はなかなかしませんよ。でも、いざ、したときには変な話、見に行きますよね、自転車に乗って、わあすごいぞとか言って。だけど、原子力発電所が爆発したら見に行くどころじゃなくて、もうパニックになって逃げるしかないですね。この違いがやはりある。

ですから、火力発電所は効率がいい、それは高い圧力と温度の蒸気を最初からつくるから。原子力発電所はちょっと怖いから最初に低くしているから熱交換率が 30％で、3 分の 2 は温排水として海に出していると。日本は海がありますから海に出していく。その温排水は物すごい熱だか

ら海際につくることになります。だから津波が来ちゃったわけですが、ヨーロッパでは、海がなかなかないから川際につくります。そうすると、冷却塔といって、日本にはないんだけれども、何というか筒みたいなのから湯気が出ているのがよく見えますね。あれは冷却塔といって、あそこで気化熱、空気で熱をとっています。日本は海の水で熱を冷やしている。ですから、外国の原子力発電所は川の水を少しとって、それであの冷却塔から水をたらたら流して熱をとる方式です。日本のほうがいいんですよ、水でだーっと。でも海はどんどん温かくなりますが。その廃熱というのは物すごい邪魔で、温暖化も起こしますし、でもその廃熱も役に立つということで日本でもウナギをつくっていますね。それからフランスはワニを飼っています。ワニが逃げたりして大変なことになったりしたところもあります。

そういうのが原子力発電所です。ですから、技術的には何のこともない、火力発電所よりも下なんだけれども、とにかく事故が起きたらもう終わり、事故が起きたら怖い、もうそれだけが違うわけですね。例えば、今回みたいに事故が起きると、もう何年たつかわからない、そういう状況になってくる。

原子力発電所はたくさんある、たくさんあると言いますが、これは棒グラフで1年、このある年に運転開始したすぐです、ピークは1986年か1985年ですね。こっちですね。33基あります。1年、世界でですよ。運転開始、つまり建設完成ですね。60年代から70年代、80年代のものです。もう減っています。今ほとんどつくられていません。この青い数字は廃炉ですね。もうなくしたいというのがだんだんふえてくるようになって、原子力発電所は70年か80年代にはやった技術だということができます。だから、これが蓄積量ですね。現在動いている量の、これは横ばいです、1990年以来横ばいです。ですから、これはこっちの数字を見ていただくと、450、430ぐらいでもうずっと横ばい、1990年からこの20年間、横ばいです。発電能力は3.7億キロワットで横ばいということで、まあ世界的にふえていないんですよね。ふえているのは中国、日本もふえてきましたね、あとは大体一定レベルです。

今、注目されているのはチェルノブイリとウクライナですが、チェルノブイリでは1986年の4月26日に事故が起きました。日本人はもう忘れていましたが、実はチェルノブイリと同じように福島も土地が汚れてしまいました。それで、じゃ、その後はどうなるんだろうと、25年後はチェルノブイリの今ではないかというふうに言われて注目を浴びています。私は4度、チェルノブイリに行きまして、ちょっと被曝もしたんです。まだ、こうして元気にはしていますが。

今どうなっているのというかお知らせしたいと思います。これがチェルノブイリが事故を起こした直後ですね。こんな写真は我々知らなかったです、チェルノブイリの事故のときは、私も仕事していましたが。事故のとき、こっちのほうが写真に写っているんですけれども、何かまだ壁があるところで写真を写して、何かわからないなと言っていたのを覚えています。こんなのを見せられると、世の中がひっくり返って、これは原子炉の核燃料、ウラン燃料、ウラン、直接大気、開いて屋根ももう、格納容器ってないですから、屋根も吹っ飛んでふたも吹っ飛んで、ここで、

ぐつぐつ一千数百度の金属の液体ができて、シューッと上に上がってヨーロッパじゅうを汚染したと。だから、ここはまだ熱を持っていますから、ぐつぐつなっているところです。どうしていいかわからない。近づいたらもう物すごい放射能ですからね。

これは爆発した直後、火事になりました。いろんなもの燃えました。火事を消さなければなりません。火事を消すということは、とにかく物すごい放射能の中ですから死を覚悟するわけですよね。ソ連はやらせるんです。消防隊は軍隊ですから。行けといったらもう、ここで二十数人死にました、放射能で。

日本で問題になったのは、日本でもう一回爆発が起きて、物すごくものが上がったら、それは仕事をしたと言えるのかという倫理的な問題です。チェルノブイリのその問題、日本でも起きたんですが、考えるとややこしいし、そこで、日本では大事故は起きないんでしょうということがあったんです。そうだそうだ、大事故は起きなかったんだということで話はとまっていたわけです。だから、日本は何の用意もしなかった。

チェルノブイリはここで、この二、三日で二十何人が死にました。これ4号炉です、ここ3号炉です。3号炉の運転士と、4号炉がここにある、4号炉の運転士は瓦れきに埋まったままですが、3号炉の運転士さん、その後、十何年も運転していました。私も何度も入りました。壁の一つ向こうは何人か死体が埋まったままなんだよ、ははははとか言っていました。

これは、このチェルノブイリの爆発した後に駆り出されて上からいろんなものを落とした、砂が一番きいたらしいんですが、これ、ヘリコプター部隊の隊員です。この人たちが会をつくっていまして、私もインタビューしました。どうなっているかというと、放射能で死ぬということはないんですが、物すごい放射能を浴びていますから、体調が不良なんですよね。強度の倦怠感で、昔、原爆ぶらぶら病といって、原爆に遭った人はやる気がない、だらだらするという、働かないと言われていたんですけれども、全く同じ症状でたくさんの人が苦しんでいる。そして全く同じに、お前は働かない、だめだとか、職がなくなってウォッカにおぼれて病気になって死んじゃうという人が多かったですね。

この人たちは、上から砂とかいろんなものを落として、全然うまくいかなかった。放射能って見えませんから、はかったらこわいんだけれどもはからなかったら怖くなくて、知識がなかったら怖くないんですね。この人たちは1986年ですから、1980年ごろのアフガニスタン戦争にみんな従軍したんです。アフガニスタンに行くと、こういうヘリコプターで上からゲリラを撃つんですが、下からミサイルがしょっちゅう飛んでくるらしいんです。ですから、あれに比べると平気の平左と言っていましたけどね。何年かたったら健康被害。今、問題になっている、よく何ミリシーベルトといいますが、それはがんのことを言っているんです。がんで死ぬ確立が何人に1人、何万人に1人で、そこを基準にしていて、大丈夫だとか言っていますが、がんの裾野には物すごい健康不良、体調不良の人がいます。そういうのはわかっていないです。

こういう人で作業させるんですね。これは防護服といいますがうそで、うそと言うのは何だけ

ど、ほこりを吸わないようにするだけで、内部被曝で放射線は体を透過しますから、半分防ぐというか、外部放射線はゼロです、防ぐ率はですね。防護服を着ると何か防いでいるような気がして、なりますが、物すごい放射線を浴びる。この人たちは徴兵で、60万人ぐらい徴兵されてチェルノブイリを除染し、こうやって、こういうのを人力でつくっているわけです。まあまあふたをしているんですが、これでは怖いからといって、この上にもう一個大きなふたをしようという話が今出ています、石棺と言われる。作業に使った車両は全部もう捨てています、何万両も林の中に。これ、チェルノブイリ、こんな感じです。雪の時期ですから。ヘリコプターなんかもいっぱい捨てています。

これは、チェルノブイリの原子力発電所を手前の町プリピャチの町から撮った写真です。これは、私が手前のあるホテルの屋上、瓦れきいっぱいです。ここプリピャチは、ソ連の一番進んだうらやましい町だったんですね。原子力発電所で働く人たちと家族が住んでいるという町で、有名でした。原子力発電所の事故の起きた翌日、翌々日ですか、ちょっと3日間だけ保養地に行くから着がえだけ持ってバス乗ってと乗った切り、一度も帰ってこない人が多いですね。

これは、キエフにあるチェルノブイリを撮ったというものですが、この名前は村の名前です。名前書いてバツしていって、消えた名前ですね。消えた村は、いなかですから500ぐらいあると言われていますね。三、四十万人が失いました。

こういう、これ、バッファローですね。野牛ですね。バイソンとかバッファローとか。バイソン、バッファローというのはアメリカにいます。だけどヨーロッパにもいるんですね、少し残っているんです。これは、ウクライナの一部にコアが残っていて、それをチェルノブイリに持ってきて、繁殖させているんです。人間がいないからちょうどいいやということで。ちょっとえさを置いたりして、どんどんふえています。繁殖計画大成功ですが、体の中放射能でいっぱいです。ですから、体調不良を訴えているかもしれない。

こうなっていますね。家なんかはこうなっている。土地は森に帰った。これ、サマショールと書いていますが、住んじゃいけないところに帰っている人はいっぱいいます。何といっても、もう町のアパートなんか住めないよという人もいっぱいいますし、もう年だし、放射能もいいやということで帰っています。そういう人はいっぱいいまして、ここが村です、僕らが取材に行くと喜んでごちそうしてくれたり、このおばあさんがしてくれるんです。それで、電気も引いてもらって郵便も届いたり、もう普通に、ある程度もういいやという感じでやっています。でも、ソ連なんかは割とそういうずさんなところもあるけれどもしっかりしたところもあって、18歳以下の子供は来ちゃいけない、そういう孫に会うんだったら自分が出ていかなくちゃならないということですね。孫の親は時々食料とか持ってきてくれるんだけど、孫には会えないといって、そういうことを言っていました。サマショールというのはわがままな人というロシア語です。わがままに自分で帰っているという意味らしいですね。

これは、2006年の私の写真ですが、ここは道路なんですよね。道路脇で、森の中に入ると放射

能がほとんど下がらない。半減期、セシウムの半減期が30年ですから、表面にずっと残っているんですよね。ですから、計算上30年たったら、今20年後の写真ですから、半分ぐらいになっているんですが、半減期が30年ですから、それ以上には、その計算値でしか下がらない。ほとんど森の中はですね。コンクリのところとか雨で流されたところは、そのほこりはどっかにいっちゃいますから、土の上はほとんど一緒です。

ですから、チェルノブイリでは除染はしていません。これ、大事なことなんですが、畑とか森なんか、やっていられないわけですよ。じゃ、ここをはいてどうするんだと、その土をどこに持っていくんだとか、そのお金に見合う経済的効果はないから、チェルノブイリでは道路とか、ちょっと住んでいる家が密集している、どうしてもとらなきゃいかんところは水で洗っていますが、いわゆる土のところ、畑、森なんかは手をつけていません。日本はお金持ちだからやったらどうですか、わははと言っていますね。確かに、こういうことですから、落ち葉かきをして何十年しても何割かが減るだけで、そういうことをする経済合理性があるのかというのがチェルノブイリの判断で、日本の人が調査に行ってびっくりします。でも、どちらが、日本とチェルノブイリの間に日本の回答はあるんでしょうが、そういうものです。

だから、危ないところは全員避難して違うところに村をつくっている。だから、村に帰りたいという人もいるけれども、もういません。二十何年たつと、お年寄りは帰りたいと言いながら死に、若い人がふえ、森は、もとの村は崩壊していますから、何もありませんから、もう帰りたいという人は今はいません。それがいいか悪いかは別ですがね。

これは、あるところなんですが、もう線量計、これは私の手ですが、かちんと線量計一番大きいところでももうはかれない。これは物すごく感度のいいやつで、最高は30マイクロシーベルト、1時間当たり、だけど、かちんともうちゅうちょなく振れていましたから、100ぐらい、もっといっているかもしれません。バスの運転手が1分だけだぞと言ってとまってくれたんですが、ここには汚れたものを埋めているところですね。家屋とか、それから森とか、森でも近くの森は切り倒して埋めているんですね。それが20年たっても全く……。

これは、葉っぱをレントゲンフィルムの上に乗せてから、それで現像すると、その放射線でこんな形をつくっていると。つまり、葉脈に沿って放射能の粒が根から入ってここは深く入っている。葉っぱは、だから樹木というのは放射能だらけです。それが秋には落ちて、また土に返り、また根から吸ってという永遠のサイクルをやっています。だからなかなか減らないということですね。だから、逆にたくさん吸い取るものを植えてそれを捨てれば掃除することになるんじゃないかといって考えていましたけれども、物すごく少ないですね、やっぱり吸い取るというのは。放射線でも吸い取るというのはありませんから。だから、それで日本では一応失敗です。チェルノブイリでもいろいろと、いろんなものを試しましたが、それによって除染はできないというのが結論です。

これは、ベラルーシのあるゴメリという大きな町があるんですが、そこの医科大学の学生で、

甲状腺という、のどのところにある、今少し問題になりつつありますが、甲状腺が異常を起こしたりがんになったりするので、その摘出手術をした子供たちばかりです。ゴメリ医科大学の学生ですね、二十ぐらいか21歳ぐらいですが、その子供たち、西暦2006年に二十ぐらいですから、1986年には数歳、4歳、5歳、6歳のときに被曝して甲状腺ががんになって摘出した子です。そういううちの子で、医者の卵を大学のお医者さんが、僕ら取材に行くと集めてくれていて、インタビューしたときの写真ですね。うちのカメラマンが撮った写真ですが、この隣に男の子が1人いたんですが、新聞に載せるときは、男もういいやとかなんか言って切っちゃいました。かわいそうに。

この子たちは日本人が手術したので手術跡が小さいという話です。甲状腺は甲状腺ホルモンというのを出しますから、ホルモンを毎日飲み続けるということで、死にはしません。だけど、みんな口をそろえて言っていたのは、何か体調がいつも重い、朝起きたとき重い、何か鉛の朝だと言っていました。ジョークかはわかりません。それからのどに空洞感がある、そういうことも言っていました。これ、みんな、えりの高い服を着ていますよね。それは傷があるからです。若い子も冬でも夏でも高いのを着ますと。どんな傷なのかというのをちょっと見せてくれとは言えないんだけれども、こういう、ことしの方ははいどうぞと見せてくれました。こんな、日本人のお医者さんだと三、四センチでできるそうなので、かわいそうですね、ケロイドになっています。大人でもなります。

チェルノブイリはそういうことで、総死者数は4,000人になるであろうと。4,000人になるであろうと、これは、これだけばらまかれたら4,000人ぐらいがんになる計算になるということです。全体のばらまかれた放射能と掛け算してある係数を掛ける、その係数というのは広島の係数なんです。広島、長崎の係数しかないんです、世界の放射線被害は。でも、チェルノブイリは内部被爆が多かった。ものを食べてじわじわとくる。広島、長崎は一瞬の外部被曝、全然違うんですが、それしか数字がないので、だからわからないということですね。

事故が残したものは、京都府に匹敵する5,000平方キロの無人地帯、40万人が土地を追われ、500万人がまだ汚染地に住む。ベラルーシでいえば、損害は国家予算の32年分。畑や森は除染しない。

ソ連は社会主義国家でした。ウクライナもベラルーシもそうです。ですから、警察権力的に、ここは全員避難、もうここへ帰っちゃいかんと決めることができるわけです。ですから、ある種合理的なことができるわけです。ですから、向こうに行って取材して、帰りたいという運動はないんですかといったら、そんなものないな、決めたら終わりだと言っていましたけれども、向こうは日本のような自由な国とは違うわけですね。

賠償をある程度します。家を買い上げました。車も買い上げました。そして新しい家をつくります。新しい職も与えます。社会主義ですから。新しい職というのはどういうことかというと、全員に、働きたい人に職を与えるわけです。実際どうなるかというと、簡単ではなくて、技術者、

エンジニア、機械のエンジニア、自動車のエンジニアだったらそのとおり働く、教員だったら働けるかもしれません。多くは農民です。農民ですから、コルホーズとかソホーズというところの近くにある集団農場に、このぐらいの100人は入る、このコルホーズに入ってください、そういう形で職を与えます。そうすると給料はもらえるんですが、もともといる人がいますから、入ってこんでもいいとかといっていじめられたりしていますよね。もとは100人で働いて動かしている農場にもう100人来るわけですから、生産力は上がらないわけですから給料が減るわけで、すごくけんかもしたりしていましたね。放射能はこっちに寄るなとか、世界でも同じような言葉でいじめられていました。

福島の話に戻ります、最近、堺屋太一さんが、福島事故は第三の敗戦か、こういう論稿を出していますね。ちょっと話題になっています。これはどういうことかというと、ここは堺屋太一さん、明治維新と太平洋戦争が第一、第二だというわけです。それは西洋的なものに負けたということですよね。負けたところから這い上がったと。今回も、今回はちょっと西洋的なものに負けたんじゃない、何に負けたかわからないんですが、私は、これも同じようなぐらいか、それぐらいの衝撃がある、日本の弱いところに負けた、日本自身に負けたんではないかと思います。

特徴としては責任者の無責任さ、それからインタビューに出てこないんですよ、責任持っていた人が。これはすごいですね、本当。東京電力はほとんどインタビューに応じませんし。日本は原発事故にどこまで対処できるかわからなくなってしまった。こんな事故が起きてみると個人の自由と強制措置との関係が本当にややこしくなってくる。村に帰りたいという人がいる、自分の職業を失った、賠償しろと、自由を失った、賠償しろと、ある人は帰りたくないからもうお金もらってどこか行きたいと、そういう人はどうするか、まだ決まっていません。

それから、高放射線下での作業を命じることができるのか、日本では。死ぬかもしれないところに行って作業できるかと。原子力発電所事故の問題は、作業する人は死ぬかもわからない。しなかったらいつまでも出続けるんですよね。チェルノブイリは、余り知られていませんが、10日間物すごく出続けました。10日でぴたっと終わりました。それは、多くの人の犠牲で、死んだ人もいるし、それからヘリコプターが落ちたということもあって、上から砂を落としているときに電線に引っかかって落ちて死んだり、いろんな死者が出ています。でも、そのかわり10日間でとまったからあのぐらいで終わったんです。私が取材すると、そのことを言います。我々は逃げなかったんだと。我々の友達はそれで死んだり、私も健康を失った、世界を我々は救ったんだという言い方をします。つまり、事故が起きたらだれかが何らかの物すごい犠牲に遭うわけです。そういうものなんです。その覚悟とか準備がないとなかなかやっちゃいかんのですが、日本の場合は先ほどから申し上げているように、大事故は起こらないというふうに大変美しい言葉ですべてが終わっていたわけです。ですから、すべての混乱はそこから来ているという。

これは、そのことに関して私が書いた記事です。高放射線下での作業をだれがするのか。ここに書いています。旧ソ連チェルノブイリ原発事故の後、いわばタブーになっていた大問題に直面

している。要するに、原子力事故を今どう考えているかというのをもう少し長いんですが、今動いているのは54あるうちの2基ですよね。じゃ、何で日本は動いているのか。こうやって電気があるのか。この前、原子力大国フランスの政府の偉い人が来て、私の知り合いが呼び出されて、こっそり意見を聞かれました。日本の政府の偉い人に会う前にちょっと話を聞いておきたいという。だから、本当の話を聞きたいわけです、日本は何で動いているのか、社会が、54あって、必要だからつくっていたのに、52とまってどうして動いているのかと、それを言っていました。それはいろんな理由があって、節電しているのもあるし、それから物すごい余裕の火力発電所があるということがありますね。でも、それにしてもすごいですよね。

福島は何を失ったか、これ、福島でいきますと今は静かに福島地域が地盤沈下、地盤沈下というのは物理的じゃなくて社会的な地盤沈下です。一番大きなのは家に住めない、それから第一次産業ができない、それから工場とかが閉鎖されて職を失うわけです。収入がなくなる、それで動く自由もない、もっと大きなのは子供たちの受験戦争とか競争とか就職とか、そういうものに随分負けていくわけです、地域ごとですね。それは、この大阪とか東京で子供が塾に行って大学に行く勉強をしているときに、福島の子は体育館の中にいたわけですから、負けますよね。チェルノブイリでは、その子たちのためにチェルノブイリは被災者枠をつくって別枠でいい大学にいっぱい入れました。日本も、福島のほうで少しやる大学もあります。

私は、失っているのは自由な日本の基本的人権だと思います。動きたいところに動けない、旅行できない、そして突然に職を奪われる、収入をなくす。で、ちょっとお金をもらうんですね。そのお金というのは基本的人権剥奪代だと私は思っています。要するに、自由を失った代金だと。ですから、1家族100万とかきていますが、失うものはもっともっと大きいんだと思います。

それから、3月11日の、朝日新聞をとっている方は覚えておいていただきたいんですが、3月11日の新聞に30年後の福島という新聞が出ます。そこにはどういうことが書いているかというと、30年後、2040年でどういう福島になっているかというんですが、人口は半減です。49.2%減、高齢化率は44.7%、65歳以上ですね、これ日本です。つまり、人口半減して高齢化率が日本一、生産活動は大変低迷する、福島経済は常に低迷を続けるというものが出てくる。それは当然なんですよ。今、帰れないわけですから、お金がある人、元気のいい人、東京に息子がいる人、親がいる人、親戚がいる人は、そして多少お金がある人というのは、もうどんどん離れていっているんですね。生産力のある人たちは。そういうことが今起こっています。

日本が失ったものは大きくて、こういう地域を抱える日本がこれからいかなくちゃならないわけですから、そして皆さん考えていただきたいのは、日本は80年代以降、ジャパン・アズ・ナンバーワンという金持ちだと思われてきました、言われてきましたが、今は貧乏な国になっています。OECDという先進国の集まりがありますが、1人当たりGDP、人口当たりGDPは今、下から4分の1です。つまり、昔、結構1番、2番、3番ぐらいにいたんですよね。結構、1990年ぐらいに旅行なんかされたりしたらいい目を見たり、そのころ、サラリーマンになったりした人が

多くて、給料がよくて、家も買って子供も育ててという方が多いと思うんですが、今、日本は下り坂の国です。その国がチェルノブイリのような問題を、福島を抱えて今からいかなくてはならないわけですから、額面だけはなくて、本当に大きなものを失っている。何を失ったかわかりませんが。ですから、財政再建さえ決まらない政治状況で、福島のことも全然決まりません。そして、そこで生きている人たちはじわじわとした生活破壊、それが重なってくると人権破壊につながっていっているんではないかなと思います。

じゃ、脱原発という話ができていますが、できるのかと。ドイツは、福島の後、脱原発をもう一回考えて、基本的に決めていたんですが、2034年までに原発をなくそうと決めていたんですが、福島の後、もう一回委員会をつくって、2022年までにやめようと、あと10年ですね、10年で原子力をゼロにしようという脱原発を決めました。そのときの理由の抜粋です。なかなか納得度がある。

原発の安全性は高くても事故は起こり得ると、まさにそうですね。そして事故の場合はほかのどんなエネルギーよりも危険であると。次世代に放射性廃棄物などを残すのは倫理的な問題がある。ほかに、より安全なエネルギー源がある。電気をつくる手段としてならばどんなものでもある。原子力発電所も要するに電気を使っているわけですから、電気をつくるんだったら何でもあるじゃないかというのがこれですね。温暖化の問題もあるので化石燃料は解決策ではない、再生可能エネルギー普及とエネルギー効率の改善で段階的に原発ゼロに向かうことが将来の経済にも大きなチャンスになる、ドイツ人はこういうふうに論理的に考えて政府もそれを決めました。電力業界もしようがないと。

朝日新聞も実は、これは昨年の7月13日、社説で、これは1面の社説の責任者である大軒という人間の論文と、それから中のほうの紙面に5本ぐらいの社説を2ページぐらい載せまして、もう一気に、原発を将来ゼロにしようというふうに意見を変えました。それまで朝日新聞は長いこと、戦後、1950年代から、原子力は将来は担うものだと、安全性を気をつけていればいいというふうに言い続けてきました。最近は、文句の度合いを深めていましたが、原子力を否定はできませんでしたが、昨年の7月13日にこういう転換をしました。これはいわゆる社論と言われるもので、会社の意見です。私もこの委員会のメンバーで、何度も議論して、もう変えるべき時期だと私も主張しました。

でも、朝日新聞というのはたくさんの人の集団ですし、記者もたくさんいますから、その人たちをすべて強制するものではなくて、私たちがこの論説委員という社説を書くメンバーである部署というか経験のある人間の集団で考えた今の段階で考えたことというのは尊重してほしいと、そして、今の人たちは自由な考えをして、また5年後、10年後にまた新たな意見をつくるでしょう。それは、だから我々は今考えた、歴史、事故が起こった国のメディアとして歴史的な責任もあるので、今は意見を出しておかなくちゃならないということで、意見を変えました。朝日新聞だけですが、毎日新聞も似たような意見ではあります。原子力、これからもやれという新聞のほ

うがまだ多いです。

じゃ、日本で脱原子力はできるのか、ちょっと難しいように感じましたが、ある国が、大きな国が脱原子力に力を切りかえるとするときに、世論と制度が変わらなければいかんと思うんですけれども、それで、世論というのは政党だとか電力業界がどう考えているか、メディアの論調だとか、それから原子力のNGOは日本では弱いですね、それから市民グループ、研究者グループはどんな意見を言っているかとか、制度としては電力の自由化と言われるものが必要、そして、受け皿として自然エネルギーは、まあ考えてくれなければだめだろうと、自然エネルギーをふやすための、じゃ、政策はちょっとしたものがあるのかと、まだ何もないですね、自然エネルギーは電力のまだ1%です、日本は。ということで、なかなか日本ではまだ簡単ではないと思います。しかし、事故を起こした国ですから、それはそれなりのスピードでやっていけると思います。

これはドイツのある農家です。2006年ぐらいの写真ですね。これはシャープの太陽パネルですね。ここにちょっと小型の風車があって、これは隣の家の風車になっています。これは1,000万円かけて30キロワット、高値買い取りをしてくれますから25年間、これで、これ農家の方ですが、収入の4割ぐらいが電気になって安定している。これ、納屋ですかね、ドイツは納屋がある。納屋の屋根がねらわれているというか利用されています。この人は牛を100頭ぐらい飼うと言うんですけれども、牛減らしてもいいなと、電気を売るほうがいいよ、電気はえさを食べないとか子供を産まないとか何か、それはまあそうですが、もうやめるんじゃないかと思うぐらい喜んでいました。

これは私の身内の大阪府内の家です。取りつけています。どのぐらい、これは4キロワット。補助がないというんですから280万円でつけました。今は補助もあって安くなって220万円ぐらいじゃないですかね。これが昨年、今の家の収支です。設置規模4キロワット、280万でつけたけれども今つけると恐らくこれぐらい。2011年、電気の使用量4,500キロワットアワー、発電量はほぼ9割です。95%ですね。だけど、もちろん夜は発電しませんから、昼はこの発電したやつを使ったり売ったりしているわけですね。高値で買い取ってもらえますから。この4,500キロワットアワー掛ける23円で計算すると、大体1年間の電気代10万円、皆さんの家も大体それぐらいじゃないかと思うんですが、電気代は何だかんだいって実際は1円も払わずに関西電力に8.5万円もらっていました。つまり、価値というとややこしいけれども18万円ぐらいの価値があるということですね。ですから、これ、実際どのぐらい関西電力からもらえるかはややこしくて、昼間に家にいない人がいいんですよ、使わないから。きょうみたいな天気のいい日は家から出て図書館ぐらいに行ったら、全部売るんですよ。ですから、天気のいい日は電気消せとか言っていますけれども。家の中の電気を消すと発電したもの全部関西電力に売りに行ってもうかるということなんですね。つまり、十数万円の価値を生み出すと考えたらいいと思いますね。

皆さん、おうちがあって屋根がある人、屋根がないとだめですね。屋根があって南向きにちょっと傾いたような、南向き31度が一番いいんですが、隣にビルなんかあったらだめですが、新車

を買う値段の遊ばせているお金があれば、これをつければいいと思いますね。これ、今、高値で買い取りしてくれています。1キロワットアワー42円ぐらいだったと思いますが、この家は48円とちょっとおかしいですけれどもですね。高値で買い取れば十数年でペイしますね。10年ぐらいは高値で買い取ってくれて、あとは恐らくちょっと安くなると思うんですが、だけど、電気を全部自分のところでつくっているという気分はなかなかいいもので、お金に余裕がある人は皆さんつけてください。

これまでは高値で買い取ってくれなかったもので、2009年までは、20年ぐらいかかっているんです、二十何年。こういうところで時々お話しさせていただくんだけれども、60歳超えて年金、今の方はいい年金もらっていますから、お金と屋根はあるんだけど20年たったら寿命がない。だから、最近は寿命のことも考慮して政府が短くしてくれていますので、十何年……。

それから、これ、ちなみに風力発電は大きな風車1本で、大阪と和歌山の間なんかに立っていますが、あれ1本で大体1,000軒分の家庭だったら電気をつくっているんですよね。もちろん風がとまったらとまりますから、これだけではやっていけなくて、送電線と結ぶ工夫が要るんですが、量的にはだから物すごく大きいです。だから、これからは大体そういう時代になってくるでしょうね。

今、原子力発電は先ほど見たように、3.7億キロワット、ここに3.9と書いていますが横ばいですね。風力はこういっているんです。2011年、風力は2.4ですね。2.38億キロワット。風力がですね。原子力は、ここでは3.9に書いています。3.9億キロワットです。実は、風力は2011年ですが、原子力は2012年です。原子力は2012年がくっと下がります。日本とドイツが大きく下がりますから。風力はぐっと上がって、もう三、四年で抜きます、風力発電が。そういう時代になっています。

これは、日本はどうやって原子力をふやしてきたか。1973年、第1次オイルショックが起きたころ、もう石油ですね。発電の7割は石油だったんです。これじゃいかんと、考えまして、石油火力はつくらないと。火力は石炭で、高効率石炭とLNGをふやしました。そして原子力をふやしました。そして、きれいにバランスがとれたようになっていました。これは2006年ですね。問題は自然エネルギーがほとんどないということです。だけど、この原子力なくなるんですね。日本はある程度いいバランスにいったんですが、原子力がなくなって、あとこれから考えなくちゃいけない。

これはスペインのフラメンコです。私の写真、なかなかいいでしょう。ではもう一度。スペイン、これを見に行ったわけではなくて、スペインは今、太陽光発電、あるいは太陽熱発電になって、物すごく盛んになっています。これ、太陽熱です。これは鏡です。鏡に光が反射してここに光を集めて、ここでパイプに通した水を温めて、ここのタンクに入れて、蒸気をつくって発電するんです。ですから、太陽電池は半導体によるちょっと難しいんですが、電気を直接つくるんですが、これは太陽の熱ですよ、熱を。太陽の動きに合わせてというか、計算しているんですけれ

ども鏡が少しずつ動く。この白いのは、実際に私たちもここに行きましたが、白いのが見えるんです。水蒸気の中に散乱して、ごみとか水蒸気に当たってですね。ここを鳥が通ると焼き鳥になると思いますが、通らないそうです。ちょっとやばいと思うんでしょうが、実際、こういうふうに白く見えたのはびっくりしました。

こういう荒地がいっぱいあって、そのところではこういうのがどんどんできています。これは太陽電池を敷き詰めるよりも、晴れの多い地域では圧倒的に安いそうです。今、スペイン、それから北アフリカ、アメリカの砂漠でこれをどんどんやっている。効率がよいそうです。これはまた太陽の熱です。これは反射ですね。放射型になっていまして、ここの焦点に当たると集まるところのパイプに水いっぱい通していて、ここでためて、それでまた発電するわけです。それを上から見るとこうなんです。これ、1キロぐらいありますから、1キロ以上ありますから全部で200キロぐらい長さがあるんですが、これだけで10万キロワットぐらいですね。だから原子力発電所の10分の1ですが、でも荒地がいっぱいありますから、スペイン。これはグラナダ市郊外で、もうちょっと横のほうに行くと、ここがシェラネバダ山脈で、グラナダというとアルハンブラ宮殿のすごい近くです。こういうことをやっているんですね、世界は。

これは、これも同じスペインで、ジブラルタル海峡近くの村です。これ、坂の上から撮っているんですが、目ざわりだと思いませんか、これ。目ざわりですねと村の人に言うと、ああそうとかいって全然気にしない。なぜなのか、自分たちがもうかるから。これをよその資本が来てつくっていくと、これはもう大反対が起きますよね。村が自分たちで決めてつくると問題起きないんですね、これ。景観の問題も起きないし騒音問題も、何百メートル離れているわけで、こういう状態になれています。日本も地域の人がつくればいいんです。地域の人が判断すれば、景観問題も騒音問題も自分たちで解決できます。

フランスでもドイツでも、畑の中にぽんぽん立っていまして、そこ、トラクターのちょっと横に立っているのが普通の風景です。日本は農地をつくって田んぼをつぶすには物すごい制限があってなかなかできません。

まとめさせていただきます。

きょうは、原子力発電所の事故は何だったかというのを主に話させていただきました。私は、それは取り返しのつかないことであると。原子力発電所というのは、大事に大事にされるのはなぜかといったら、一回事故が起きたら取り返しがつかないから大事にされるわけで、技術的には、申し上げたようにオールドテクノロジーでローテクです。原発の発電効率は低い。

この取り返しのつかない事故というのも、私はごまかしの意味で文学的に言ってはならないと思います。本当にそれを起こしてしまったんだから、それにふさわしい日本社会の変化と対策をとるべきだと思います。なぜ取り返しがつかないかというと、事故が起きたら怖いわけですね。実際、事故が起きたときに現場の整備に行くといって作業員が整列させられたけれども全員ががたがた震えていたとかいう証言もあります。そういうものであるというのをもう一回考えなくて

はいけないし、事故が起きた後はそれなりに対処をしなきゃならないと思います。

そして、私たちは、日本は事故を起こしてしまった。それも失敗でありますと同時に、事故が起きた後の放射能に社会はもう翻弄されています。放射能というのは空気のような粒の小ささまでなって、空気によって飛んでいって、いずれは落ちるんですが、ちりのように重さがありますから、ちりにくっついたものは落ちますけれども、もう隅々までいきます。ですから、一遍出したものはもう集められないんですよね。それを集めるのが除染という名前の不条理な行為なんですが、今は焼却灰に出ただとかお米に入っただとか、社会の隅々に放射能が入って社会を混乱させています。私たち社会はそれに対してちゃんとコントロールできていない。つまり、出た後の放射能をコントロールできていないというのが現状ではないかなと思います。一度出た放射能は二度と集めることはできないというのが基本だと思います。

今、その放射能、無理な仕事に、不条理な仕事に国も自治体もお金もどんどん使っています。これは先ほど申し上げたように、日本というのはお金の今からない国ですから、物すごく重荷になると思います。とりあえず 10 兆円は要るでしょう。10 兆円はとりあえず。10 兆円というのは 1 人頭 8 万円ぐらいです。4 人家族だったら皆さんで 32 万円ぐらい除染のために出す、それは回り回って税金か消費税か電気料金、東京に住む人はたくさん、10 万、とりあえず 10 万ですね、払うようになると思います。

これは明らかに東京電力が原因なんです。もし東京電力が、ある狭い地域に放射能をばらまいてしまったら、もうそこの土地を買い上げたり除染したり、そして補償したり、もう一生懸命やるでしょう。しかし、今回みたいに大き過ぎる犠牲、大き過ぎる事故には責任というのはあいまいになります。これが原子力問題の特徴です。昔でいえば戦争だとか爆撃をされて死んだ人の責任はどこにあるのかとか、そういうものに等しいような大きさです。国の機能の多くを使っているし、お金も多く使って苦労していますが、責任者はいなくなっているような状況が出てきています。

福島で起こりつつあることは、じわじわとした地盤沈下だと思います。失うものは職、収入、家、土地、そういうものと、受験戦争、就職競争、希望、大きいのは朝起きて行くところがないということ、お父さんが行くところがないので狭い家に朝からしょっちゅういて、離婚が結構起きているそうです。行くところはパチンコ屋が多いです。ですから、お金が入るとギャンブルに相当直接流れていくと。

今の時代は、皆さんもそうですが、丁寧に子供を育てて働いて家を建てて一生懸命払って、塾に行かせて少し余裕があれば都会の大学に行かしたりして、そういう一生懸命やっていた時代ですが、そういう競争からあの地域の人は、もちろん津波の地域もありますが、負けていくんではないかと思います。先ほど言ったように、この人たちが失っているものは基本的人権であって、もらっているお金は基本的人権の剥奪代であると、割に合わないものだなと思います。

それから、福島では 30 年後に人口が半減するという、これが原子力事故の実像だと思います。

問題は明らかになりましたが、こういう問題は、日本はどういうふうに克服していくのかというのが大きな問題になると思います。私は、原子力関係者の方に今度はちゃんとやるという人がいるんですね、今度がないから取り返しのつかない原発なんだと、今度はちゃんとやると言っちゃやっぱりいかんわけで、そういう話をもってしている人は、結局、その人も責任を感じてない。みんなで考えているから自分としては全然責任を感じなくても済むような感じです。我々メディアも昔は原子力発電所をバックアップしましたので、我々も我々なりに反省しています。しなければならないと思っています。

それから、原子力発電所は、じゃ、どうするのかと。今、54基あるうちの52基がとまっている。じゃ、こんなに要らなかったんじゃないかというのが、みんなが思っていることではないかと思います。そして、52とまっていて4月30日にはゼロになるかもしれません。これは日本社会の1つの意見だと思います。みんなで再稼働させようという意見よりも、再稼働させなくてやってみようという意見だと思います。ですから、これの意見を政治に反映させる仕組みをつくらないといけないと思います。少々電気代が高くなっても原発を減らすのがいいんじゃないかというのが意見だと思います。だから、それを制度に入れなきゃならないんだけれども、日本は制度に入れていないです。日本は何の制度も入れていません。多くの人は原発減らしましょうと世論調査で出ていますが、そういう制度はまだ一つもできていません。ですから、この日本社会のいいかげんさが、これから発揮されると何も変わらないのかもしれません。

原発事故が暴いたのは、僕は、日本社会のいいかげんさだと思います。第三の敗戦というのは日本社会、自分たちのいいかげんさに負けたのではないかと思っています。まず、大事故は起きないという住民をばかにした方便を使っていました。そして、その方便で自分をだましてしまったというレベルです。実際に起きたらあたふたとして安全委員会の委員長は役には立たない、保安院の検査官はオフサイトセンターから逃げ帰ると、それほど怖いものではありますが、やはり気合が入っていない。気合が入らないままやっちゃいかん問題です。アメリカなんかはそういう部隊があるんです。いざとなったら命もかかるけれども、訓練は厳しいけれども給料はいいと、そういう国もあるようですね。

東電は撤退したいと言いました。幾ら怖かったとはいえ、それは事業者としては失格だろうと思います。今は口裏合わせで、我々はそんなことは言わなかったと公式には言っていますが、表のインタビューには出てきていません。やはり、日本社会だって責任はあるべき人が責任を発揮しない、責任感を感じないというものが大きいのだと思います。保安院の院長は、理科系の人ではなくて東京大学の文系ですから、理科系のことは全然わからずに、もう全然役に立たなかった。ポストは順送りで、みんな給料もらうためにポストを順送りしていたという日本の状況です。私は、その意味で、菅さんは、どなったりぷっつんしたり口は悪いそうですが、いざというときとめたという意味においては立派だったなと思います。

これから何が起こるかは、日本ではわかりません。日本は怠惰な現実主義があると、ある人は

言っています。福島大学の副学長。つまり、まあいいや、だんだん時間がたつにつれて、考えなきゃいけないことを考えない。脱原発さえも話題として時間の中に消費されるかもわかりません。それはさせちゃいかんと思うのがメディアの役割だと思っています。私は、この１年間の取材で考えたのは、こういう大きなことが起こったら、日本も考え抜いて、決め抜いて、最後まで対策として原子力をどう減らしていくか決めるまで我々も考える必要があるんではないかと思います。大体、どんな話題だって、今、東国原さんはどこにいるか知らないけど東国原さんの話題がわーっとなって、今は全然違って、今は大阪府知事ですが、そういう話題として消費してもいいものと、この問題みたいに大事なものは、もうとことん考え抜いて、制度におろすまで日本社会も考えるべきで、そういう日本社会にならないと原子力発電みたいなものは持っちゃいかんと、それがこの１年間の経験を通じて得た大きな教訓です。

○会場　まず除染、今、福島で除染が小規模ながら進み出しているんですが、実際、私にはうちの庭の放射能を隣の家に持っていっているだけにしか思えないんですけれども、実際、究極の除染とは、どういうことが安全となる除染かというのがよくわからないんです。とにかく今、除染、除染といって各自治体というか福島の自治体、除染やっているんですけれども、ただ、何か上に土かぶせているか、ここにある放射能の土を隣に持っていっている状況、それだけにしか思えないんですね。これが１つ。

それと、これちょっと私も含めて非当事者、いわゆる沖縄と同じで、いわゆる映画見ているような状況なんですね。いわゆる当事者でない私たちは、福島、岩手、宮城の人たちにいかにかかわらんとあかんかというのを、それだけちょっとでも教えてほしいんですわ。

去年、私、石巻に行ったんですけれども、帰りに福島、立ち寄りました。もうとにかく10月でも全ページ、地元の新聞は放射能と震災復旧、それを取り扱っているんですけれども、大阪へ帰ってくると全く別世界で、ほんの数ページにちょこっと載っているだけ。この状況をいかにして私たちは認識すべきかというのを、これだけちょっと、以上です。

○竹内　除染は、放射能は30年で強さが半分になるだけなんですよね。ですからそれを待つしかなくて、なくならない。30年で半減、セシウムというのは30年かかる。プルトニウムなんか１万年とか２万年とかで半分ですが、ですから、とって運ぶだけですよね。消えることはできないわけです。それで、なかなか集めることもできない。自分の家を掃除するのはしようがない、いいことだと思います。水でちょっと洗ったりするのはですね。それで屋根の上とかで少しきれいにすればいいけれども、それはどこか流れていっているだけで、溝からずっと流れていっているだけで、どこかでたまったりしているわけです。今、利根川とかああいうところの河川はどんどん海側へ砂とともに放射能を流しています。でも、それは、ある程度は必要だと思います。その部分、その家の周りをちょっと掃除すればちょっときれいになるというのは、それはやればいいと思います。究極の除染というのはないんです。究極の除染というのは、まあ何でしょうね、自分の住んでいる家の周りはちょっと水で洗えば多少きれいになる。田んぼだったら、究極の除染

だったら上を50センチぐらいはいでどこかに捨てて、上にまた、はぐとちょっと肥えていない土になっちゃうから、何かものつくれないそうですね、しばらく。土をはいで新しい土を入れるのは、それはある種その部分では究極の除染ですが、それは、本当は経済的にはなかなか見合わないですね。

ですから、究極の除染というのは、はいでどこかに持っていって、そこは汚いものを集めて置いておくということはできます。それも今の方がおっしゃったように横に持っていくだけだけれども、だけど、その究極の除染も何でもやっているのかという、経済的なことを考えると、そのお金との関係を考えるとわからなくなってくる。だから、しようがないので住む周りは少しきれいにすると。余りに汚れたところはもう放棄するしかなくて、それから余りに汚れた田んぼではものがつくることがなくて、究極の除染ではなくて、ちょっと身の回りでやって、経済的に見合って、少しきれいなところはやればいいと思います。それ以外は本当ないと思います。今、除染、除染といっているのは公共事業でその除染をやりたい人がたくさんいるということなんですよね。それが何年かかってどれぐらいのお金がかかって、その土地の人の生活再建にどう役に立つかの議論はちょっとすっ飛んでいるから、ちょっと問題だなと思っています。

それから、どうかかわるかというのは本当に難しい問題で、福島とどうかかわるか、特に関西はやっぱり遠いので、関西、西日本の人はかなり忘れかけていて、テレビで1年たったらたくさん画面が出ていますが、津波の画面がね、ああそうだな1年たっていたなと思うんですね。どうかかわるというのは難しいですね。今、日本赤十字社じゃなくて、NGOなんか直接お金を出す人がふえています。赤十字はだらだらとして余り早く配らなくてまだあるそうですが、例えば家畜にえさをやってほしいお金をそういうNGOに出せばすぐ届けてくれるとか、実際、家畜を殺したくないので牛にもえさをやり続けている農家の人が、もう1億円近く外国からお金をもらって、そんなに困っていて、できれば寄附をして、そういうところに直接寄附をして、今寄附をすると、確定申告をするとかなり戻ってきます。ということです。

ちょっと2番目の質問にはいい答えはないですね。どうやってかかわるか、かかわらなければいけないんですが、我々メディアだってだんだん忘れて、本当の問題をなかなか書けないんですよ。じわじわ生活が落ちていくことを書けなくて、ストーリー性というんですか、いい話だとか例えばかわいそうな話は書きやすいんですが、普通に生活している人が何も問題なくじわじわ地盤沈下しているのが福島の現実ですから、それがうまく我々も書けない、ドラマチックじゃないですからね。本当はそれを知らせて日本全体で協議しなきゃならないなと思います。済みません、うまく言えなくて。

○会場　原発から将来、自然エネルギーに移行した場合に、安定的に電力の供給は確保できるのかどうか。太陽光とか風力発電とか言われていますけれども、日本の場合は非常に、年間を通じて雨の量が非常に多いと、日本海のあたりは冬は特にどんよりした天候が続いている。

それから、風力発電につきましては、日本は平野部分が少ない。山間部が非常に多い。そうい

った状況の中で自然エネルギーにかわった場合に、果たして安定的な電気の供給が確保できるのかどうか、そのあたりがちょっと私もよくわからないんですが、ちょっと疑問に思っているところはございまして、そのあたりはどうなんでしょうか。教えていただければと思います。

○竹内　自然エネルギーは不安定です。自然が不安定ですからね。太陽は昼しか照らないし、あるところで、太陽光発電も不安定です、昼しか照らないからと言っていた人もいますが、それは当然で、おてんとうさんは昔から昼しか出ていなくて文句を言われたのは初めてだろうなと私は思っているんですが、不安定です。

それから、風も吹いているときと吹かないときがある。でも、世界で行われているのは、風も1本だったら吹いているとき吹かないとき、1か100ですが、たくさんあれば大体このぐらいのパーセンテージでこのぐらいの強さで吹くという全体的な数値があります。太陽光は人間社会のクーラーと大体、暑いときには照っているとかいう感じで割といいあれなんですよね。昼間は計算できる電源です。日本は風力とか太陽光とか集めてもまだ1%なんです。ですから、これが例えばドイツなんか20%ぐらいになっていますが、そこまでなると、多少何かいろいろ問題出ますが、日本ではまだどんどんふやせばいい時代です。それで、定性的に不安定ですから、それはもちろんそうですから、ちゃんと確保する必要があります。

実は、ヨーロッパではどうしているかというと、水力発電を、電力変動の補完として位置づけているんです。ヨーロッパは水力発電がないですよね、余り、大体平地が結構多いんですが、水力発電が物すごくあってこれからもできそうなのはフィヨルドなんですよね、ノルウェー。ノルウェーがヨーロッパ全体の自然エネルギーの調整電源になりつつあるんですよ。ノルウェーはヨーロピアンビッグバッテリー、ジャイアントバッテリーオブユーロと呼ばれていまして、ヨーロッパの巨大バッテリーと呼ばれていて、調整用電源にして、今、ヨーロッパじゅうの国がノルウェーと直接送電線をつなごうと物すごく躍起になって、僕がこの前調べたのは、ノルウェーは大変もてる女性だというような言い方をしていて、水力も自然エネルギーなんですが、調整が物すごく簡単なんです。その強さを絞ったり、すぐ瞬時にできるということで、それでヨーロッパじゅうの自然エネルギーの調整電源として使いつつある。

日本もその揚水発電所というのがあって、2,000万キロワットぐらいあるんですよ。原発20基分くらいあるんですが、今は原発とまっていますけれども、普通は原発の電気で夜水を揚げて、上向きに揚げて、それで昼間落として使っていますが、それをうまく使うことによって変動はかなり調整できます。

しかし、それ以上にまだ足りない、日本は少ないですから、まだまだ入れればいいと思います。それから、風力発電は、自然エネルギーで大きな期待ができるのは風力ですが、風力発電はポテンシャリティー、可能性は半分は北海道です。残りの半分は東北です。その北海道と東北に風車をいっぱい立てればかなり賄えるんですが、東京に持ってこなきゃ意味がないんですね。東京に持ってきて東京都と送電線をきっちりつなぐと、東京というのは大消費地ですから、大きなおふ

ろですから、変動も全部吸収してくれますし、いいんです。ですから、北海道と東北の間の津軽海峡を渡ってくる送電線があるんですが、あれを太くすること、それから東北にたくさんつくって東京に送ること、東北と東京の間の送電線は今あいています。それから、北海道と東北の間の津軽海峡の送電線は60万キロしかないですが、もう少し太くすればいいわけです。60万キロしかないのに、この前、漁船が何か引っかけて20万キロ切って、40万キロらしいんですけれども、ひどい漁船もいるもので。

ですから、日本の場合はもっとふやして、ふやす中で調整の問題は出てきます。それは電気の中の2割とか3割ぐらいまでは何とかいきます。私の取材したこのスペインでは、私の取材したそのちょっと前にスペイン全国の電気の5割が風力だけで賄っている瞬間なんかがあるわけで、そのぐらいやっているわけですね、何とかかんとか。日本も5割とは言わないけれども、まだまだふえると思います。今までは1%しかない自然エネルギーは、変動するからとか、25%の原子力には代替できないからという、すぐそっちの理由を出して、1%を2%にする政策もつくってこなかったんですよ、日本はね。恥ずかしいんですよね。ですから、そういうものをもっとつくって、問題はそれからです、本当を言うと。

ですから、本当は生駒の山ぐらいに、皆さん、山に10軒か20軒で風車をつくって、デンマークでは30人、農家の人というかその土地の人ですね、農村の人30人集まったら1本つくってもいいという組合方式でやって、30人以上でつくったらすごくいい値段に買ってくれるという制度を90年代にとりました。そうすると、デンマークって500万人しか人がいないんですが、風車だらけになって電気の90%が風です、風力。それ、かつ、ベスタスという風車会社が世界一になりまして、今、デンマークはベスタスで御飯食べていると言われているんですよ。日本にある風車の最も大きなのはデスタスです。ですから、そういうこともあるわけですね。電気だけではなくて産業を育てるということもあるから、まだまだふやせるし、問題は定性的には問題がありますが、それはどこの国でも一応何とかかんとかやっていますので、悩むのはまだまだ先のことだと思います。

○会場　今回、要するに電源が落ちて大事故になったというか、発電所の大事故になったと。これの本当の原因が、ちょっと私、まだいまだにはっきりと言ってくれていないところがあってわからない部分がありまして、1つは地震で電源がおかしくなったという話と津波でおかしくなったと、この2つがあるんですよね。ご存じだったらどっちだと教えていただけますかね。これによって対策が全然違ってくる。もちろん両方に対して対策しなきゃいけないんですけどね。それが1つね。

それから、今回、プラントがGEのプラントだったですね。それで、あれが不良品であるという話が先ほど出たんですけれども、あれの話が、その後どないなったのか全然わからない。関西はGEじゃないから大丈夫みたいな話が流れているわけですけれども、それはどうなのか。

それと、最後は、これは発言力のある竹内さんにお願いなんですけれども、先ほどから原子力

反対ということで、大方の方向はそのような方向に行くと思います。

しかし、その原子力はやめるんだ、脱原発だといって、すぐにその原子力発電がなくなるわけじゃないし、原子炉がなくなるわけじゃないわけですね。そうすると、これから30年、40年そのお守りをしていかなければいけない。このお守りをどのようにするのかというのが私は物すごく心配なんです。要するに、そのためにはエンジニアを残していかないといけない。作業員も残していかなければいけない。世代も変わっていきます。滅び行く技術に対して、なかなかそういったことに、本当に一生懸命やっていこうという人たちが集められるのか、本当にやっていけるのか、ますますもってその残っている原発がもう不毛の地になってしまったらどうすりゃいいんですかということになるわけです。

これのためには、本当に国がその気になって、そういう人たちをきっちり守っていかなければいけない。そういう人たちを本当に頑張っていただくような形をつくらないといけない。ここら辺のことをちゃんと考えてやらないと、今、終わったらしまいだみたいな、ちょっと雰囲気になっているので、ここらあたりは一遍、竹内さんあたりからも厳しくたたいておいていただきたいと思います。

○竹内　じゃ、厳しくたたくと言われた最後の質問から、私たちも将来的には原子力をなくそう、これでいこうということですが、急にはならないというのは思っています。新聞でも、二、三十年かけて考えようということで、去年の7月段階では、まあちょっとどんと減らして、それからじわじわ減らしていこうではないかと言っていたのが、それは世の中はもっと早く動いていて、ちょっとこの54分の52というのをどうとらえていいかわからない感じですが、一過性なのか、それとも、もうちょっと社会のパワーが変わってきたのか。でも、おっしゃるようにすぐにはなくなりません。今は52基とまっても動いていますが、長期的には動かなくなるのは当たり前なので、要するに冷静に減らしていく、安定的に減らしていく方向を政府としてとって、国民合意をとったほうがいいと思います。

○会場　いや、そういうことじゃなしに、廃炉にすると決めてしまっても、完全に廃炉するまでに時間がかかるわけです。廃炉にするまでにその原子炉をどないして守るんですか。廃炉にする技術が要るでしょうということを言っているんです。

○竹内　だから、廃炉にする技術というのは50年とかですね……

○会場　だから、そのために人をちゃんとキープしておかないと。

○竹内　だから、それは電力業界がキープするんでしょうね。

○会場　いや、だから、そこら辺をもっと、ちょっといろいろな形で、今から続けておいていただかないと、ということです。

○竹内　おっしゃるとおり、負の遺産を守るためにお金と技術と人間が要るということですね。

○会場　そう。それは、みんなを守るために必要なんです。

○竹内　これはちょっと特殊なんですよ。普通は産業的にもう売れなくなったら、すぐにぱたっ

と終わって、大学の学科もなくなり、そして会社もなくなる。だけど、これだけは後処理に何十年も何百年もかかるということですよね。

○会場　これは国がやっぱり入ってやらないといかん。だから、そこらあたりどう考えているのか全くもって見えない。

○竹内　それは、まだだれも全くもって考えていないわけだから、見えないですね。それは当然だと思います。それで、原発を処理する、クローズするお金も原発で稼ぎながらやるというような考えもあって、どっちにしろ、ぱたっとはなくならないし、そんな社会大変換はちょっと難しいと思いますね。だから、そこはまだ、おっしゃるようにちゃんとした議論には全然なっていないですね。

それから、地震が悪いのか津波が悪いのか、これは、殺人事件でも２人が刺していてどっちの刺し傷が致命傷だったかよく２時間ドラマになっていますが、それによく似ていて、今、国と東電は全部津波におっかぶせています。全部。僕は、津波が怒るんではないかと思うんですよ。津波に全部悪くしているんですが、まず、電源が落ちた話、電源はいろんな意味で落ちたんですが、外の停電は、決定的な停電と、それから停電がなかなか直らなかったのは、直近の鉄塔が壊れたからです。これは地震です。鉄塔はその地震の山崩れで壊れて、どさっと鉄塔が横倒しになって切れて、そこで、周辺も停電していたんですが、なかなか何日も何日も修復できなかったのは地震です。

鉄塔は倒れないと言っていたじゃないかと、僕らは言っていました。そしたら彼らはこう言っていました。鉄塔は大丈夫だったんだと、基礎がだめだったんだと。鉄塔は大丈夫ってしっかり倒れました。本当にそうですね。

それから、鉄塔は倒れた、外部電源、停電になってストップしますね、そうすると予備電源ですね、ディーゼル。ディーゼルは津波でやられたんですね。津波で水にかぶったと。それは確かで、だけど、今、世の中はまだ入っていけていないんですよね。どこのパイプがどう壊れていてどこの電源がどうちぎれていてと。ですから、津波で何割で、揺れで何割とまだわかっていません。わかるかどうかもわかりませんね。やっぱり管理している人が隠すつもりであれば隠せますし。まだ入れないですよ、放射能が高くて。今、一般的に津波主犯説になっていますが、多くの人は、地震でたくさん壊れたから全然水も回らなかったって、おかしいだろうと、津波のせいにするのはやめろと、津波だけのせいにするのはね。というのが、僕らもそうだし、意見も多く。

○会場　今、東北のほうで一番問題になっているのは、膨大な瓦れきの処理だと思うんです。もう何十年もかからないと処理できないと。それを全国で手分けして処理してほしいということで、今は自主的に手を挙げたところが処理をし始めるというところで、現在、東京都、石原都知事が、まずやりますと手を挙げておられるわけですが、既に始まっておりますが、私は大変いい判断だと思うんですが、一方では、これまで盛んに頑張ろう東北とか、頑張ろう日本とか、スローガンばっかり先行して、いざ、瓦れきを地方自治体のほうで処理しようという、そういうふうに知事

が言うと地元が反対をするという、非常に日本人のエゴというんですか、そういうのが今、広がってきているんではないかと思います。

大阪府も松井知事は処理すると手を挙げておるわけですが、そういうところで新聞のやはり力というので、社説などで、やはりそういう瓦れき処理を全国民が等しく受け持とうという、そういう世論を私は起こすのが新聞の１つの力ではないかというふうに思っておりますので、朝日新聞もぜひ社説とか新聞記事などで積極的にそういうことを進めようという呼びかけを読者にしてほしいと、私はそういうふうに思っております。

○会場　関連の質問です。今の問題、非常に根が深いんです。私も堺市民として堺市議会でその問題、聞いたんですけれども、実際、大阪にも福島から避難してきているお母さんと子供さん、おられます。ほんで、福島から遠く離れた大阪まで逃げてきて、何でまた放射能を含んだ瓦れきが私たちをいじめに来るのという声もあるんです。それで一番悪いのは、その安全基準というのが国から示されていないんです。今、堺市もその安全基準を示されたなら検討しましょうというスタンスなんですけれども、何にもそれが示されていない。だから、示されたとしても、実際、その瓦れき処理の付近の住民は、いわゆる政府と東電、いわゆる国に対して不信感の塊の状態なんですね。何ぼ、何ベクレルとか何ミリシーベルトとかいう数値をこれですと示されても、だれも信用していないというのが現状なんです。私も、受け入れたらええのになと思っているんやけども、そういう反対する人の声も無視できないという現状があります。

○竹内　私も受け入れたらいいと思います。ですから、これからも社説なんかでもやっていますが、これからも積極的に言っていきたいと思います。これはエゴというとともに、もう一つのいいかげんさ、私は東京都の知事、いろんな意味で考えを異にするものですが、この件に関しては立派な人だなと思います。彼は、地方の政治家、自治体の長は受け入れるんだと説得していかなあかんという、それが政治家の役割とはっきり言っていますので、私もそう思います。そして、瓦れきは、そんな今問題になっている汚れている瓦れきじゃないんですよ、そんな。

１つは、基本的にはいろんなところで燃やして、それを電気なり何なりで回収して、ごみ処理場で燃やして電気として回収すればいいなと思います。それから、もう一つは科学の問題で、本当に汚れている瓦れきなんかは基準があっていいんだけれども、基本的には基準以前の問題で、何となく嫌だという反対で拒否されているのが多いです。これは風評被害とよく似ていて、瓦れき、汚れた可能性があるものが来るのがいいか来ないのがいいか、どっちかを選べというふうな問題で、こっちを選んでもこっちを選んでも、得はどっちもないわけですから、汚れたのは来てほしくないという物すごく単純な意見表明なんですが、本当に、今、だれかおっしゃったように、きずなとかいうんだったら、こういうときにこそ発揮して、科学的に、ここは科学のちょっと出番で、科学的にこのぐらいのベクレルでは何の問題もないから、はっきりそうしようといえば東京なんかつつがなく進んでいますから、問題ないんではないかなと思います。

それから、堺に逃げてきている人にも、放射能が本当に来るんだったら問題だけれども、逃げ

てきている人にまた放射能のものが来るんだったら問題だけれども、それは結構文学的な表現で、本当はそんな問題な放射能はないわけですから、そこは、やはりベクレルの線引きで、そんなことは言わないほうがいいという風潮に持っていったほうがいいと思いますね。ですから、せいじかとかメディアとかのはっきりした態度表明と、それからある意味での科学、数字ですね。この汚れているのは本当に汚れているのかと。我々も結構ばかで余り賢くなくて、どうしたらいいじゃなくて、騒ぎを騒ぎとして話題とし過ぎる面があって、例えば大文字で、全然汚れていないのに、わかっているのに、反対している人がいるとかいう記事を出して、それでいいかげんな反対者をふやすとか、そういう記事はあってもいいんだけれども、そんな記事があろうがなかろうが社会が正しい方向へ行けばいいんだけれども、日本はちょっとエゴといういいかげんなところがある。

だから、そういう意見があるから、私が申し上げたこの原子力という、これだけ問題になっても、また何か何となく過去と同じようなことをやるかもわからないなというのが日本社会への僕自身の不信感があるわけです。

本稿は、2011 年度帝塚山学院大学国際理解研究所・（財）大阪狭山市文化振興事業団主催国際理解公開講座（後期）における講演をまとめたものである。